

## 「万延元年のフットボール」論

— へ本当の事 — をめぐって —

はじめに

大江健三郎の小説の主人公達が流す涙について、川本三郎氏は、それを《透明な涙》だとした。それは、《特定の社会関係の中で相手に裏切られたり被害をこうむったりすることによって流される具体的な涙》ではなく、《ただいまここにあることの恐怖・怯えによってひきおこされる透明な涙》であるという。<sup>1)</sup>「万延元年のフットボール」(一九六七年一月〜七月 『群像』)の中心的な人物の奥底に巣くっているものを、私は、川本氏のこの表現に倣って、《透明な》憎悪と呼んでみたい。語り手の根所蜜三郎にしても、その弟の鷹四、蜜三郎の縊死した友人にしても、特定の関係における具体的な憎悪というよりも、ただいまここにあることへの憎悪を抱いているような人物である。そういう憎悪は、彼らが、言葉の向こうにあって彼らの生存を不安に陥れるものを強く感知することによって生じている。彼らが感知するもののうち最も問題であるのは、彼ら自身の内から生じ、また彼らの外からやってきて、脆弱な肉体を傷つける暴力的な力である。彼

らは、その力に対する自らの無力を思い、そのような無力なものとしていまここにあることを憎悪するのである。

村瀬良子

そして、このような憎悪は、鷹四が投げ掛けた「へ本当の事」について、その見極め方を方向づけているようである。小稿では、鷹四が「へ本当の事」へと至る過程で《透明な》憎悪がどう関与しているかを明らかにしつつ、彼が駆り立てられた「へ本当の事」が、どんな問題をはらんでるのかを考えたい。そのために、一ではまず、蜜三郎と鷹四を「へ本当の事」へと導く死者の一人である縊死した友人について、その内部にあったもの、奇怪な扮装での縊死によって示したなにかに迫ってみたい。また、友人の内部にあったものと、蜜三郎と鷹四のそれぞれの煩悶とが、重なり合う様についても、明らかにしておきたい。続いて二では、鷹四が兄の蜜三郎に話す筈だった「へ本当の事」と、鷹四が実際に語った「へ本当の事」との間に生じたズレを明らかにしつつ、「へ本当の事」と言葉の関係に言及したい。三では、これを受けて、鷹四が語った「へ本当の事」が蜜三郎によってどう裁断され、また鷹四がどう「へ本当の事」を示したのかを明らかにしたい。

# 一 死んだ友人の内なる〈奇怪なもの〉と鷹四の〈本当の事〉

蜜三郎の友人は、六〇年安保の際、妻のデモ行進に付き添ってやってきた国会議事堂前で、武装警官の警棒で頭を割られてしまう。裂傷は、外科的には特に重くなかったが、その一撃以来、友人の頭の内部にひとつの欠落が生じてしまい、隠微な躁鬱症が、かれの新しい属性〉となっていた。

そして、この友人は、自殺するのであるが、その自殺の一年前、アメリカ留学を中断して帰国し、スマイル・トレーニング・センターと呼ばれる〈軽症の精神異常者のための療養所〉に入る。この療養所に収容された人々は、多量の精神安定剤をのんで、〈昼も夜も、みんな穏やかに微笑して心安らかなる時をすごす〉のである。友人はその生活にすぐに適応する。しかしそこにも、暴力が横行していた。その看護人の一人は、精神安定剤をのんで腹を立てることもできなくなっている患者達に、いささかの動機もなく、腹部を強打するなどひどいことを繰り返していた。精神安定剤の服用をやめた友人は、自分が確実に腹を立てていることを発見すると、その看護人に多大な暴力でもって報いる。その結果、彼は、療養所を去らねばならなくなった。友人は、〈日ごろのとおり愚かしげなほど善良に微笑してかれを見送る精神病者たち〉に手をふりながら抱いた悲しみについて、蜜三郎に次のように打ち明けている。

ヘンリー・ミラーが次のようにいっている、かれの悲しみと、おなじ悲しみをおれは体験したんだ。実際のところその瞬間まで、おれはミラーの文章の真実性を疑っていたんだがね。《わたしも

一緒になって笑おうとしたが、笑えなかった。わたしはひどく悲しくなり、一生のうちでそのときほど悲しかったことはなかった》、これは単なる表現の問題ではないよ。(一章)

その後、自殺するまでの間、友人をとらえていたのは、へなんでもいいから、陽気にしていようじゃないか！という、やはりミラーの言葉だった。彼は、性的な偏向、マゾイズムにおちいたりしたあげく、朱色の塗料で頭と顔をぬりつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこんで、縊死してしまった。

蜜三郎の友人の体験したところをこのようにたどってみると、彼の縊死が、暴力と深く関わっていたことは明らかである。ただ、彼が、自分が体験した暴力からどういう認識に至ったのかについては、不分明な部分が残らざるを得ないだろう。アメリカから帰国する直前、やはりアメリカに滞在していた鷹四と遭遇した友人は、その〈頭のなかでこんぐらがっている結び目〉は何なのだ、と鷹四に問われている。友人は、その正体が自分にはっきりしてることがあっても〈他人には、ひとつの狂気を育てた人間が極限状態で理解したことなどつたえようもない〉、とへもの悲しい情熱にとらえられて、鷹四に訴えていた。

しかし、ミラーの悲しみを引用して打ち明けられた彼の悲しみの背景には、次のような認識があるだろう。人は、結局のところさまざまに暴力にさらされて生きることを免れず、患者達の善良な微笑も、薬物によって感情を殺し、〈この世界のもっともおとなしい家畜のような生きもの〉となるといった、鈍さや〈愚か〉さを選ぶことの上に可能であるにすぎない、というような。療養所を出てからの友人の言動

は、鈍さや愚かさを彼流に選びとることによって彼が生きようとしたことを、表しているようである。だが、彼は結局、そういう生き方も放棄せざるをえなかったのだろう。

そのようにして、〈極限状況で理解したこと〉を、この友人は、他人には伝えようがないと言いながらも、縊死するときに敢えて奇怪な扮装をすることによって、伝えようとしていることは間違いない。そして、その縊死の様によって人々のうちに喚起されるものは、友人が伝えようとしたことそのままではないにしても、それから大きくはずれるものではないと思われる。

友人の親戚達は、彼のそういう死の後、翻訳のノートなど彼が書いたものをすべて焼却させたのだった。そのことについて、蜜三郎は、  
友人の親戚どもは、遣された草稿やノオト類から、頭を朱色に塗り素裸で、肛門に胡瓜をさしこんだ怪物がもう一頭跳びだして、生き残った者たちの世界を脅かすことを惧れたのであると理解している。  
蜜三郎が理解しているように、友人は、確かに、奇怪な怪物としての姿を人々の前にあらわにすることで、へ生き残った者たちの世界を脅かしている。友人が死を賭して体現して見せたもの内には、人間が存在していることのかかる意味をも否定しようとして、言葉には至らなかったものが込められているようである。

脅かされているのは親戚達だけではない。蜜三郎自身も、ノートの焼却によって抱いた〈深い安堵の気分〉を隠せない。また、蜜三郎の妻も、〈頭を朱く塗って裸で自殺する人間のいることが恐いのよ〉と、友人の行為によって、自らが生きている世界を脅かされている。妻は、  
蜜もまた、頭を朱色に塗って、裸で自殺してしまうかもしれないか

ら、私は恐いのよ」ともいう。彼女は、単に蜜三郎に自殺されることが恐いというよりも、人間への肯定を根底から揺るがせようとするような意図をそこにかぎとって、それに繰り返し脅かされることを恐れているのである。

友人の扮装がそれほど人々を脅かすのは、それが赤裸々な暴力性を突きつけ、絶望へと追い込むに十分なものであるからだろう。蜜三郎は、自分もまた同様の自殺をするかもしれないと妻に言われると、戦慄のうちに、妻の幻影のなかの自分の縊死体を見る。

死んでいる根所蜜三郎の朱色の頭、よく溶けていない絵具の粉の粒つぶが、耳たぶのうしろにこびりついて血のしずくのように見える。(一章)

このときの蜜三郎が、友人がその頭と顔を塗りつぶした朱色の塗料から、血のイメージを喚起されているのは、友人の意図にたがわなからであろう。また、縊死体を見た友人の母親の顔は、蜜三郎のとらえたところでは、〈融けてゆく鉛みたいにぐんにやりと弛緩し〉、〈即物的に徹底した絶望を表現している顔〉であった。息子の自殺のうちに、生涯の最期を少しでも人間らしさで包もうとする意図を感じる事ができたなら、この母親はそこまでの絶望に落ち込んでしまうことはなかったのではないか。蜜三郎は、そういう死者の密葬の世話をしつつ、友人をへまさに救助しがたい死者だとも感じているのである。

友人の扮装は、このように人々を脅かしている。この友人は、自分の扮装が、暴力をこうむる裸の身体の救いよのなさとそれへの絶望を、生者に共有させるものであることに、果たして無自覚だったのだろうか。それはむしろ意図されたことであろう。そういう意図の背後に、

私はさらに、《透明な》憎悪を読み取りたいと考えるのである。

そして、蜜三郎も鷹四も、友人の内部にあったそのようなものを通じるものを持っており、それは彼ら自身によって、友人の内部にあったものと重ね合わされてゆく。特に鷹四は、自らの問いである《本当の事》を見極めようとする過程で、友人が伝えようとしたものを、

《本当の事》と名付けている。また、蜜三郎は、鷹四の《本当の事》と友人の内部のあるものが、そのように絡み合う様を確認しつつ、自分自身の内にも《人間の根底にとぐるをまいて》いる、本当に恐ろしい奇怪なもの《が増大することを恐れている》。

鷹四は、友人とアメリカで出会ったとき、友人の問いかけに対して《本当の事をいおうか!》と応じた。ただ、その時鷹四が話したことは、自分が性病にかかり、薬を不法に手に入れようとしている、そのいきさつだった。後になって友人が、《鷹の本当の事とは、おれが実際に聞いた内容とはすっかりちがうものだったのじゃないかと思うね》と、蜜三郎に話したとおり、鷹四は、友人に《本当の事》を話したのではなかった。そのまま友人は死に、アメリカから帰ってきた鷹四は、蜜三郎の妻から友人の死の話を聞く。それ以後、鷹四は、《あの人の自殺のスタイルの意味だけは理解しているように思うんだ》と、蜜三郎に語るほどに、くりかえしその意味を考えたのだという。

あの人は、頭を朱色に塗りたてて素裸で（中略）首を縊ろうとしておそくは、本当の事をいおうか！ と叫んでから、そのまま首を縊ってしまったんだ。たとえそういう言葉を叫ばなかったにしても、一瞬後、もうとりかえしのつかないかれ自身の死体が、

頭を朱色に塗った素裸の死体として他人どもの眼の前に残ること

を勇敢に認めて跳ぶ、という行為自体に、本当の事をいおうか! というぬきさしならぬ声が響いていると感じるんだよ。（8章）

鷹四は、友人が《行為において、本当の事をいって死んだ》と確信し、友人に《あなたの叫んだ本当の事は聞こえた、と合図した》とも言う。《かれがどのような本当の事をいったのかはわからない》としながらも、そのように、友人は《本当の事》を言おうとしたのだとし、また、自分が《本当の事》を聞き取り得たと思っっている。それは、なぜだろうか。それは、鷹四が、友人のなかにあったものと、自分が本当にいおうとしている《本当の事》とが、おなじように暴力に根差しつつ、おなじように絶望的な人間観へと至るものであることを、知っているからなのだろう。鷹四は、暴力に関わって煩悶しており、友人の煩悶の根もまた暴力にあることを、アメリカでの出会いの時にすでに見抜いていたらしい。

アメリカでの別れ際、鷹四は友人に、公民権運動を記録した一冊のパンフレットを手渡す。そこには《焼けただれてふくらんだために細部があいまいになって稚拙な木彫り人形のように見える黒人と、それをかこんでいる粗末な服装の白人たちの写真》がのっていた。その写真から受け止めたものを、友人は、蜜三郎に次のように語っていた。

それは滑稽で悲惨でいやらしく、まことに赤裸々に暴力そのものを提示して、ひとつの恐ろしい幻のように見るものの心をとらえる。その幻のもとでは、自分がつねづねどっしりした恐怖の圧力に卑しく屈服していることをあらためて思い出さざるをえない。

#### （1章）

そして、友人の感情の世界で、その《幻はすぐさま、二つの水滴が

ひきあうようになめらかに、かれ自身の頭のなかの正体不明な煩悶にむすびついたのだという。友人は、鷹四が、その写真を巻頭におさめたパンフレットを自分にくれることの意味を十分に知ったうえで、残していったのだと考えた。

そのようにして、二人が互いの「核心にふれた」ことを知る蜜三郎であるが、彼自身もまた、友人の内部のあるものへの通路を持っている。蜜三郎の右目は、小学生の一団が投げってきた石つぶてを受けて、視力を失っている。そのことは、蜜三郎にとって「厭らしく無意味な事故」であり、しかも、その本当の意味を理解することへの恐れを感じさせている。また、蜜三郎の赤んぼうは、頭に「血と脊髄液のたっぶりつまった代赭色の瘤」を持って生まれてきた。その瘤は、「自分のうちに内蔵されているにもかかわらず、自分には統御できない奇怪な力の所在を実感させる」ものだった。その瘤の切除の後、赤んぼうは「穏やかに見かえすほかにいかなる人間の反応も示さない存在」となってしまった。つまり、蜜三郎も、暴力的な力に威圧され、「奇怪な扮装での死を生みだしたあるもの」をその頭のなかに増大させかねない、危機的な状態を生きているのである。「正体不明のままのそれ」は、生き残った者を災厄の場所へみちびくことがある」というのは、蜜三郎は、自分にもまた友人の様な狂気と死がありうることを、知っているのである。

そして、鷹四は、こういう蜜三郎に向けて、「本当の事」を話したがっている。蜜三郎は、鷹四の「本当の事」をどう受け止めるだろうか。蜜三郎と「本当の事」との問題へと進む前に、私は、鷹四が、彼の話す筈だった「本当の事」を果たして言いえたのかどうかを、検討

しておかねばならない。

## 二 鷹四の語った「本当の事」―その言葉と声―

鷹四が蜜三郎に言おうとしていた「本当の事」とは、鷹四自身の説明によれば、次のように、人間にとって相当に破壊的なことからなる筈だった。

おれは、ひとりの人間が、それをいってしまうと、他人に殺されるか、自殺するか、気が狂って見るに耐えない反・人間的な怪物になってしまいか、そのいずれかを選ぶしかない、絶対的に本当の事を考えてみていた。その本当の事は、いったん口に出してしまつと、懐にとりかえし不能の信管を作動させた爆裂弾をかかえたことになるような、そうした本当の事なんだよ。(8章)

このように、鷹四は、それを口に出すことによって、人を、死か、反・人間的な怪物への変貌のいずれかへと追いやるのが必至の破壊的な言葉を、その胸のうちに模索していたのである。反・人間的な怪物への変貌というのは、縊死した友人のありように影響を受けてのことと思われるが、その友人も、鷹四曰く、「行為において、本当の事をして死んだ」のだった。鷹四は、そのように究極の破壊的な言葉を、実際に口に出したいと思っていたのである。

鷹四が、「本当の事」を口にすることで自己を破壊しようとしていたのは、暴力的な人間である自分を処罰したからである。鷹四は、「誰かと共同しなければ生存することのできない、音楽というよりも音そのものに敏感なほかは智恵の遅れた娘」だった妹と二人で、伯父の家に養われていた。鷹四は、その妹との近親相姦のあげくに、

妹を自殺に追いやってしまっていた。それ以来、「暴力的な人間としての自分を正当化したいという欲求と、そのような自己を処罰したいという欲求に、引き裂かれて生きてきた」という。蜜三郎の友人は、鷹四が、パンフレットのあの写真をじっと見つめながら「本当に厄介きままることを思い悩んでいるようだった」と、見て取っていた。そのようにして鷹四は、暴力的な力に対して自分がどのような回答を出すべきかを考えつづけ、暴力的な力を発露する自分を消し去ることを選ぼうとしたわけである。

ところが、鷹四が実際に話した「本当の事」は、彼の話す筈だった「本当の事」とは、ずいぶん様相を異にすることとなった。鷹四の「本当の事」を聞き終えたあと、鷹四の内に生き延びたいという思いが存在していることに気づいた蜜三郎は、鷹四の告白を、「絶対的に本当の事」ではないと、指摘する。

いま、僕に聞かせた汚らしい告白にしても、もし僕が、いやそれだって、いったん口に出してしまうと他人に殺されるか、自殺するか、気が狂って見るに耐えない反・人間的な怪物になってしまふかの、絶対的に本当の事などではないと鷹に保障してやれば、「きみはただちに救助されるといったぐいのものじゃないか？」

(12章) (引用文の傍線は全て私に付した。以下同じ。)

ここで蜜三郎が指摘するように、確かに、鷹四の告白は、かれが意図していた「絶対的に本当の事」とは違っている。そして、その原因は、「本当の事」を語る鷹四の語り方にあるようだ。妹を自殺に追いやるまでの鷹四の物語をたどりつつ、「本当の事」を語る鷹四の言葉のありようを、検討してみよう。

鷹四と蜜三郎の妹は、いったん音楽が鳴りはじめるとその他のすべてを意識することがなくなるため、村の若者たちの覗きの対象となったりしたが、鷹四はそんな妹を守りぬこうとした。鷹四は、妹が自分にとっての「唯一の女性的なるものだった」と言う。さらに、自分と妹とのつながりに、次のような意味も持たせている。

おれは自分と妹をめぐって「一種の貴種流離譚を作りあげて、曾祖父さんとその弟以来の自分の家系にひどく拡大した誇りを抱いていた。同情的にみてくれるならおれはそのようにして、伯父の家に妹と厄介になつてゐる境遇のコンプレックスを撥ねかえそうとしていたわけだ。」(12章)

こういう「選ばれた特別の二人」という意識は、妹にも教え込まれた。そういう二人について、あの兄妹は一緒に寝ているという噂もたてられた。鷹四はその噂に暗示を受けてしまったことを、次のように弁明する。

おれは頭のふにゃふにゃしたファナテイクな十七歳の高校生で、「そうした暗示に弱い孤独家だったんだよ。」

そして、酔った百姓達が母屋で歌い騒いでいた夜、その音に怯える妹をなだめているうちに、やはり酔っていた鷹四は、妹を犯してしまったのである。鷹四は、その時の自分が、「濁み声で真夜中過ぎまで歌い続ける連中におれは猛烈に腹を立てて、ひどく反社会的な気分だった」のだと言う。そして、その後も鷹四は、妹と性的な関係を持ち続けるが、それについては、「すでにおれは欲望と恐怖心とで頭がやられていて、妹の側にたつてものを考えることなどではしなかった」と振り返っている。

この二人の秘密を、妹が他人にしゃべることを恐れた鷹四は、へ他人にさえ知られないように注意していれば、おれと妹とは、ふたりとも他の人間と結婚することはなしに、兄妹でこれをやりながら一生暮らすことができる」と、妹に教え込んだ。妹は鷹四と離れると生きてゆけないと漠然と信じていたので、鷹四が、自分たちは他の人間に背を向けて兄妹で反社会的に結束して生きてゆくのだと納得させると、本当に喜んでいたという。鷹四は「恋人同士」のようであったあの日々ほど幸福だったことはないと言えよう。ところが、妹が妊娠すると、鷹四は妹に、名を知らぬ人間に強姦されたと言わせる。伯父は、妹に墮胎手術を受けさせた。妹に嘘を言わせたことについては、鷹四は、次のように自分の卑劣さをひたすらに認めている。しかし、自分は救いようもなく卑劣だと言葉にしてみせることは、自分を救うことにもなるのである。

妹との性関係が曝れてしまったら、ただちにおれは恥のために死ぬだろうと信じた。しかし伯母は、おれのことなどいささかも疑いはしなかったから、そこでおれは救いようもなく卑劣な裏切りをやってしまったんだ。おれはごく微細な勇敢さもない厭らしい策謀家で、正直な妹にあたいしなかった。

ただ、この成り行きは、正直でない卑劣な自分というところに鷹四を止めておいてはくれなかった。怯えから立ち直れない妹は、鷹四との性交渉によって慰められたと思うが、傷つくことに敏感な鷹四は、それを受け入れられない。

おれは妹の、その内奥が傷ついている性器そのものに恐怖心を持つたし、生理的な嫌悪感をもまた抱いた。それだって当然のこと

じゃないか？　しかし、その常識は妹に通じなかった。そして鷹四は、依怙地になった妹を撲ってしまふ。妹は、驚き、悲しみとともに鷹四の言ったことは嘘だといって、その翌朝自殺してしまった。

ここまでたどってきた鷹四の物語は、人間に対する究極の否定に向かわせる言葉よりも、むしろ、人間らしい迷いや弱さへの共感をさそう言葉によって織り上げられていることがわかる。この告白の以前に、鷹四と蜜三郎が、初めて「本当の事」について意見を交わしたとき、鷹四は、「絶対的に本当の事」を言う勇気がなまみの人間によって持たれうと思うか、と蜜三郎に尋ねていた。それに対して、蜜三郎は、「本当の事」を言った人間も、へなお生き続ける方途を見つけたさだろうさ」と答えた。鷹四は、蜜三郎のその考えを次のように言っている。蹴っていた。

もし、本当の事をいってしまった筈の人間が、殺されも自殺せず、なんだか正常の人間とはちがう極度に厭らしく凶々しいものになることなしに、へなお生きつづけることができたとしたら、それは直接に、かれがいつてしまった筈の本当の事が、じつはおれの考える意味での、発火しつづつある爆発物みたいな本当の事とは違ふものであったことを示すだけなんだ。（8章）

しかし、鷹四が蜜三郎に話した「本当の事」は、それを言ってもへなお生きつづけることができると、へなお生きつづつある爆発物みたいな本当の事とは違ふものだった。鷹四が発したのは、次に蜜三郎が指摘するとおり、許容されることをどこかで望んでいる言葉の群れだった。

たとえ無意識のうちにあつても、きみは僕がそのような過去の体験ぐるみ現在の鷹を許容して、引き裂かれている状態から一挙にきみを解放してくれることを期待して饒舌にしゃべりたてたのではないか？（12章）

そして、鷹四自身も、究極の破壊的な言葉を求めつつ、それを言いおせる自信があつたわけではないようだ。自分を死刑になるかりんちされるかという局面に追い込んでから、〈蜜、おれは話したいことがあるんだ。蜜に本当の事を言いたいんだ〉と、蜜三郎に訴える時、蜜三郎のとらえる鷹四は、〈その言葉の意味の真面目な伝達を疑っているように、またなれば安心してというような具合に頼りなく恥かしげに〉そういわねばならなかつた。またその一方で、その言葉は強く蜜三郎に伝わって〈コダマを発した〉のでもある。このように、〈本当の事を言いたいんだ〉という鷹四の言葉のうちには、〈本当の事〉への分裂した態度が見出される。鷹四は、〈絶対的に本当の事〉を言つて自分という人間を破壊したいという願いと、〈本当の事〉を許容可能なものにした、生き延びたいという願いとの間で、分裂していたのである。

こうして、鷹四が意図していたような〈絶対的に本当の事〉は、鷹四の〈饒舌〉の向こうにあいまいにされた。ただ、その饒舌の合間に、言葉で覆つてしまえない〈本当の事〉が、言つてしまふ筈だつた〈本当の事〉が、声によってあらわれているようだ。蜜三郎は、〈本当の事〉を言おうとしている鷹四が、いよいよ妹の自殺の原因を語ろうとする前にあげた泣き声を、次のように受け止めている。

鷹四は僕がその声の記憶によって、自分の生涯の残りの期間いつ

までも、生き延びがたく気の滅入る「時」の待ち伏せに悩まされるだろうと予感するような、いいようもなく暗く惨めな啜り泣きの声をあげて暫く泣き続けた。

そして、このように、鷹四が表そうと意図していた、いいようもなく暗く惨めでどこにも救いのない人間の姿、生き延びがたく思わせるものを、より顕にしているのは声なのである。妹を決定的に絶望させたいきさつを語る前にも、鷹四はおなじような声を発し、蜜三郎はその声に〈まいったく受動的に〉耳をかたむけ、縮こまってしまうのみである。

かれはついに啜り泣きの発作から完全に開放されることはなしに、ああ、ああ！ という呻き声をはさみながら、かれの生涯のもっとも苛酷な経験話を話した。

また、鷹四は、その饒舌な物語の最後に、それを破るような妹の肉声を響かせている。

鷹チャンガ、イッタコトハ嘘ダ、アレハ他人ニ黙ッテイテモ、シテ悪イコトダッタダ、と妹はいった……

この、それまでの鷹四の饒舌とは断絶し、妹の肉声を喚起するカタカナは、それを語っている鷹四が、妹の肉声を呼びさましていることをあらわしている。その声は、鷹四の言葉によって覆われることも掬い上げられることもなく、ただ言葉から取り残されているものである。そして、その声は、鷹四の物語を語る蜜三郎にもまた、聞こえていたのである。

このように、鷹四の〈本当の事〉は、言葉を重ねれば重ねるほどその向こうにかすみ、言葉が滞るときに、逆にあらわになっているとい

える。

三 〈本当の事〉と蜜三郎の憎悪  
―言葉のむこうの否定性へ―

このようにして、鷹四が〈本当の事〉を語った直後、鷹四の饒舌の向こう側に破壊的な恐ろしいものを聞き取った蜜三郎は、しばらくの間は、ただ威圧されている。

四囲の森のまっくろの高い壁のあいだに人間の聴覚を越えた振動数の鋭い声が飛びかっているように感じられる。それは窪地を覆う空間いっぱい横たわって軀をくねらせている異様に巨大な怪物の叫び声のようだ。(12章)

このとき蜜三郎は、鷹四が言う筈だった〈本当の事〉をしつかりと聞き取っていたのだといえる。ところが、鷹四がさらに〈無防備な自己慰安の響き〉のある呼びかけを付け加えたのをきっかけに、蜜三郎は、鷹四が〈絶対的に本当の事〉を言って自分を破壊するどころか、生き延びようとしているのだと追及し始める。鷹四の呼びかけとは、自分の死後、その網膜を使って蜜三郎の目を手術してくれということだった。

そうなればすくなくとも、おれの眼球だけは、おれの死後も生き延びているんなものを見るわけだ、それが単なるレンズの役割にすぎないにしても心が安まるよ。(12章)

この言葉を聞いた蜜三郎は、〈意識では制御できない突然の拒否の炎〉をもえあがらせ、それとともに、鷹四の饒舌の向こう側に感知していた恐ろしいもの、〈森の叫喚と蔵屋敷全体の小さな黒い人影の幻

影〉が、消滅したのである。

確かに、蜜三郎が鷹四に予測して見せるように、彼は村の人間達のリンチを免れるだろう。また、彼が村の娘の事故死を自分のおかした殺人のように見せかけても、科学的な鑑識が、これは単なる事故死の後の死体毀損にすぎないと確認すれば、死刑になることもないだろう。しかし、自分の殺人を演出した鷹四は、おそらくそこまでは見通しておらず、自分が死に追い込まれるだろうと本当に思っていたのであって、決して、蜜三郎が追及するように〈自分のまちなな死を信じているふり〉をしていたわけではなかっただろう。ただ、それでもやはり生き延びたいという潜在的な気持ち働いてしまうことはある。だが、蜜三郎は、鷹四のうちの生き延びたいという願いを、〈卑劣〉さへと結びつける。

今度だってきみはなんとか卑劣な手段を弄して生き延びるにちがいない。そのようにして醜く生き延びた後、いや自分はリンチされるか死刑になるかの危機を積極的に選んで、わざわざ窮地にはいりこんだのだが、お節介な他人どものおかげでやむなく生き延びてしまったのだと、死んだ妹の幻影に向って弁明するのが、きみのやりかただ。

このような非難の言葉に対し、鷹四は、蜜三郎の自分への憎悪を指摘し、そのゆえんを問う。

蜜、きみはなぜそのようにもおれを憎んでいるんだ？ なぜ、そのような憎悪をおれに持ち続けているんだ？

この問いに、蜜三郎はまともに答えない。〈憎悪？ 僕がどう感じるかの問題ではないんだ〉といい、自分は〈客観的な判断をのべて

いるだけだ」という。このように蜜三郎は、鷹四に指摘された自分の内なる憎悪を顧みることがない。だが、蜜三郎は、とどのつまりは自分とおなじように醜く生き延びるだろう鷹四に、まさしく近親憎悪を抱いていたと思われる。

蜜三郎は、生き延びた場合の鷹四の将来を予測して、へまったくおとなしい日常生活者として、社会復帰するだろう。それより他のいかなる幻想も、結局は無意味だ」という。また、曾祖父の弟を万延元年の一揆の英雄的な指導者だったと考え、彼に自己同一化したという鷹四の願望に対しては、へまうその種のヒロイックな幻想に血を熱くする年齢ではないよ、鷹、きみはもう子供じゃない」と諭す。しかし、自らが勧めているへまったくおとなしい日常生活者」という在り方は、蜜三郎が最後まで憎悪し続けている在り方なのである。しかも、彼は自分の憎悪するその生き方を諦めのうちに選ぶしかない。蜜三郎は、〈存在感〉もなく、曖昧で不確実な気の滅入る日々を、いかなる積極的な意志もなく生き延びつづけゝる生よりは、死のほうがましだと考えるし、実際に自殺への衝動を抱きもする。しかし、彼がそれでも生きているのは、ただ、死への恐怖のためである。

鷹四の自殺の後、蜜三郎は、アフリカでの仕事と、日本の大学の英語教師の仕事という、二つの選択肢のまえで、自分が結局は英語教師の仕事を選ぶだろうことを思う。そして、そのことについて、〈今度こそ僕は老年と死に向う変更不能の生活をはじめなのだ〉と、老いや死に対して手も足もだせずにただ生きることを忌み嫌っている。妻に、英語教師の仕事を引き受けると告げるときも、アフリカでの通訳の仕事を捨てることを思い、〈耳がたちまち火照ってくるほどあからさま

に未練がましい自分の声〉を聞かねばならない。アフリカでは、無力であるだけの無様な生ではない生があるのではないかという、かすかな希望を持っているからである。

地下蔵の新発見によって、鷹四がその生涯を模倣しようとしていた曾祖父の弟が、そこで一揆の指導者としての自分を終生保持し続けたことが判明すると、彼のような、〈不連続な飛躍を強いるあるもの〉、言葉の向こうにあるなにもかに敢えて対決する生き方と、そのようなものとの対決を選ばず、あいまいに生き延びる生き方との、二つの方向を思い、後者の生き方をする者として自分を位置づける。むろん、それは蜜三郎にとって嫌悪すべきことである。やはり後者の生き方をした曾祖父が描かせた地獄絵の、その赤色の〈優しさ〉のような、〈自己慰安〉さえ必要とするほど苦々しいことなのである。

地獄絵に定着されたこの赤の「優しさ」はもっとも端的には、かれら自身の地獄を正面からひきうけ乗りこえてゆく恐ろしい人々の脅威を忘れるべくつとめて、もっと薄暗く不安定で曖昧な現実生活をおとなしく生き延びつづけようとする者たちの自己慰安のための色彩だ。(13章)

鷹四が〈本当の事〉を言って自分を破壊したいと思うその反面でやはり生き延びようとしていることを、蜜三郎が、〈卑劣〉さや〈醜さ〉として否定してしまつたことの背景には、右のように曖昧に生き延びるしかない生への、憤懣と憎悪があったと考えられるのである。鷹四が〈おれが、妹やきみの妻にしまつたことを知る前から、蜜は、おれに憎悪を抱いていたじゃないか〉と反問していたように、鷹四に向けられた蜜三郎の憎悪は、妹にむごいことをされたから、また自分

の妻と姦通したから、といった具体的なことのためだけではない。鷹四は自分の無力さを様々に超えようとしたが、その試みは、蜜三郎には、〈弱みだらけのペテン師じみた冒険〉というように、成果の疑わしい模索としかうつっていなかった。実際、自分の死後も眼球だけは生き延びることに心が安まるという鷹四の言葉は、〈絶対的に本当の事〉などといっても、それによって人間性の向こうへ飛躍し去ることができず、蜜三郎とおなじ地平で生き延びようとする、彼の心を明かしている。蜜三郎は、畢竟、自分と同類である鷹四を、自分を憎悪するように憎悪していたのである。

— こういう憎悪を秘めた蜜三郎の追及のために、鷹四は、縊死した友人と同様、暴力をこうむる身体の救いようのなさとそれへの絶望を、死の沈黙のうちに開示するところへ、進むほかなくなったのだといえる。悲惨なことに、鷹四は、散弾で顔をぼろぼろにするという死に方をするので、彼の意図していた〈絶対的に本当の事〉を言うことができた。鷹四は、やはり蜜三郎の友人と同じく、〈行為において本当の事を言っただけ〉のである。

かれの頭と裸の胸の皮膚は、そこに数多くの柘榴が蝟集したような具合に裂けて血にまみれ、男はズボンだけつけた真っ赤な石膏製の等身大模型のようだ。(12章)

鷹四は、死後の自分の姿が、蜜三郎の友人の、頭と顔を朱で塗りつぶした縊死体と似通うように考えて、樺の大梁に縛りつけた猟銃を自分の顔に向け、その引き金をひいたのだろう。また、鷹四は、自分が銃口を見つめて立ったはずの壁に、赤鉛筆で自分の頭と肩の輪郭を描き、それにへふたつの大きな眼だけ克明に書き込み、その眼に散弾

を撃ち込んで〈窪みの底に鉛の眼が開いているよう〉に見せてもいる。その図と自分の死体によって、鷹四は、今度こそ、いかなる肯定も救いもとどかない絶望的な姿を突きつけた。人間の図の頭の脇には、〈オレハ本当ノ事ヲイッタ〉と書きつけてあった。その〈本当の事〉もまた、生存への憎悪の色彩に染めあげられているのである。

蜜三郎は、その鷹四について、〈自分たちの地獄を確認し、「本当の事」を叫んでそれを乗りこえたのだ〉とし、〈曾祖父の弟にならうべき熱望につらぬかれた自分の「identity」を確認し、自己統一をとげた〉として、なんとか肯定的な意味を付与しようとしている。また、蜜三郎の妻が鷹四の子を生み、養護施設に預けたままの赤ん坊を自分たちの生活のなかに連れ戻す、という未来のなかに、希望が託されているようでもある。さらに、生存への憎悪の色彩である血の赤色に對し、地獄絵の炎やハナミズキの裏葉の赤のような〈優しさ〉にみちた赤色を配し、憎悪を和らげようともしている。

しかし、蜜三郎の憎悪は、鷹四に〈絶対的に本当の事〉を開示させるのと引き換えに、鷹四の再生への言葉を完全に絶ってしまったのである。その蜜三郎自身、アフリカでの生活を始めようとしているが、それも〈自分の内部でなにか起こっているのかを検討する暇もない〉、自らの〈内奥のあるもの〉に分け入る言葉とは無縁の生活である。この作品では、人物達の深層にうごめいている憎悪が増大して、言葉を押しつけようとしている。

そうして、言葉によって掬いあげられない、生存の内なる否定性が、どうしようもなくあとに残されるのである。蜜三郎の友人や鷹四の遺した否定性、また、蜜三郎夫婦の赤んぼうが示し続けるかもしれない

否定性など、この作品には、言葉が届きがたく思われる（本当の事）があふれている。もし、そういう否定性を否定性のままに残さず、折り合いを付けてゆこうとするならば、鷹四がそうしたように、饒舌によってそれを許容可能にするという一応の方向は、この作品にも見えている。ただ、この作品は、結局はそういう方向を排している。別の拙稿で述べたことであるが、「個人的な体験」では、同じように言葉の向こうにあるものに直面しつつも、それらを切り捨てて調和的な言葉のうちに世界を平明化しようとする力が働いていた。その「個人的な体験」から二年以上を経て連載を開始した「万延元年のフットボール」は、そういう力を極力退け、言葉が掬い上げられない否定性をひたすら描き尽くそうとしているようである。

おわりに  
—谷川俊太郎のプレテキストと「万延元年のフットボール」の関係—

「万延元年のフットボール」には、多くのプレテキストが取り込まれている。その取り込まれ方は、各々のテキストによって当然に違っている。なかでも、谷川俊太郎の「鳥羽上」<sup>16</sup>は、単に（本当の事）という言葉がそれに由来しているというだけでない。その一編の詩の全体が、「万延元年のフットボール」を陰画とするならば、その陽画とみなしうるような、深い関係にあるようだ。次に、その詩の全体をひいておく。

何ひとつ書く事はない

私の肉体は陽にさらされている

私の妻は美しい

私の子供たちは健康だ

本当の事を云おうか

詩人のふりはしているが

私は詩人ではない

私は造られそしてここに放置されている

岩の間にほら太陽があんなに落ちて

海はかえって昏い

この白昼の静寂のほかに

君に告げたい事はない

たとえ君がその国で血を流していようと

ああこの不変の眩しさ！

この詩について、守中高明氏は、《「本当の事を云おうか／詩人のふりはしているが／私は詩人ではない」という詩句が書きつけられたとき、そこでは、世界の豊饒と完結性の前で言葉を放棄したいという欲望が肯定される一点において、「詩人」という呼称もまた放棄されていた》<sup>17</sup>という。この、《世界の豊饒性と完結性》とは、《私の肉体は陽にさらされている／私の妻は美しい／私の子供たちは健康だ》という詩句と、《私は造られそしてここに放置されている》、また《この不変の眩しさ！》という詩句とが主となって、表わされているとこ

ろのものであろう。そのような、豊饒で完結した世界である〈ここ〉は、〈何ひとつ書く事はない〉場所であり、勝原晴希氏がいうように、《〈私〉の言葉を超えている》場所なのである。〈ここ〉で〈詩人〉の呼称を放棄した〈私〉は、〈この不変の眩しさ〉に感嘆するのみである。しかし、〈この不変の眩しさ〉は、〈私〉にとつて恩寵であり苦痛であると、勝原氏はいう。<sup>7)</sup><sup>8)</sup>

〈さらされ〉〈造られ〉〈放置され〉とあるように、〈私〉は徹底的な受動の位置に追い込まれている。(中略)それが至福であるのは、〈私〉が他のあらゆる事物と同じ資格をもつてものとして世界内に存在し得ているからであり、それが苦痛であるのは、ものとして存在することは人間としての自己遺棄に通ずるからである。

つまり、「鳥羽上」とは、自らの言葉を超えていると感じられる世界にあって、言葉を放棄することによつてもたらされる至福と苦痛をうたったものということになる。その点で、この一編の詩の全体は、「万延元年のフットボール」と重なり合うのである。

一見、両作品が異質であるようにみえるとすれば、それは、二つの世界の明暗における差異のためである。「鳥羽上」の〈私〉は、〈白昼の静寂〉のうちの豊饒と〈不変〉を前に、言葉を放棄しようとしてゐる。これに対し、大江の作中人物は、死の暗黒に取り囲まれた、みすばらしく寒々しい〈不変〉の世界の前で、言葉を放棄しようとしていたわけである。しかし、陽にさらされた豊饒であっても、暗黒の空洞であっても、その世界が自らの言葉を超えていると感じさせるために、《徹底的な受動の位置》、《人間としての自己遺棄》という、同

じところに人を追い込む。先に、両作品が陽画と陰画の関係にあるといたしたのは、こういう意味においてである。そして、大江の人物達は、この詩にこめられた〈私〉の至福と苦痛から、各々の詩句の小さなイメージに至るまでを、様々に受け継いでいる。

蜜三郎の友人も鷹四も、暴力が遍在する世界で、結局〈何ひとつ書く事はない〉というところに至り、〈造られそしてここに放置されている〉ものへと還っていったのである。特に友人は、鷹四と違って、〈本当の事〉を語ろうとすることもなかった。〈白昼の静寂〉ならぬ死の暗黒の静寂のほかに〈君に告げたい事はない〉、といわんばかりに、陽にさらされていたろう肉体を、奇怪な扮装の縊死体に変えた。友人が去った療養所は、海辺の、〈建物の半分がひとつのサンルームをなしている〉ものだった。そして、生き残った蜜三郎は、「鳥羽上」の〈その国で血を流して〉いる〈君〉を思わせる。蜜三郎は、たびたび血を流している。小説の冒頭では、浄化槽のための穴ぼこにうずくまって自分を生き埋めにしようとし、土をひっかいた指の爪がはがれてしまう。右目の見えない彼は、最後に行くこととなったアフリカでも、自分が樹木や岩石にぶつかって血を流すだろうことを予測している。しかし、そんな〈君〉と別れて、友人は〈不変の眩しさ〉へと至った。

また鷹四は、蜜三郎の憎悪の前に、力ない饒舌をふるうが、最後には友人と同様、無残な静寂を頭わす。蜜三郎は、死んだ鷹四を見て、〈男はズボンだけつけた真っ赤な石膏製の等身大模型のようだ〉と思ふ。〈赤い石膏製の人形〉のように見える鷹四もまた、〈造られそしてここに放置されている〉ものとなった。



(7) (8) (9) 「谷川俊太郎の詩を読む 鳥羽1 (『旅』)」  
(注6所掲誌)

(10) 「谷川俊太郎に聞く」 (『現代詩手帖』 一九八八年十一月)

(11) 「『何ひとつ書く事はない』と書けるということ」 (『散文』

一九七二年十一月 晶文社)

(12) 注6所掲論文

(13) 注11所掲。なお、引用は『散文』(一九九八年一月 講談社+α文庫)によった。

テキストは『大江健三郎全作品』第二期 1 (一九七七年十一月 新潮社)によった。引用における傍点は、すべて原文に付されている。

(むらせ よしこ)